

「私は近隣五軒の裏切者に囲まれて居る一職工の妻であり、私は悲しく、なりませぬ死なれた方や職をわめられた方にどうして顔が會されませう。せめておとくの人は心を変へず戦つて下さい。外へ出れば裏切者、畜生者、友を賣つた奴、私を氣狂にする奴、顔を見ればならない。たとえ一人になりましても戦ひませう、久留殺せ久留殺せと虎の威を借る狐は今の腰のけ」を云ふ、今日も長田神社で唱へられた萬歳は初めの一編は聲が出たがあとは涙………(原文のまゝ) (七、三)、神戸又新日報

折柄曇り空の朝を生田前へ流れ出で三宮神社前を過ぎ一同蜿蜒たる長蛇の陣を作り鐵道線路側に沿ひて宇治川に出で、市廳舎前を楠社東門に繰込まんとするや、警官隊に阻止されたため止むなく楠社参拜を見合はせ、南下相生町に出で本町筋を西して新開地裾の電氣局前、爭議團本部前を通過して七宮に参拜すべく、鐵道踏切に通路を取れり。此前後より行列は駈足の步調となり、車上の賀川氏、徒歩の野倉氏を先頭に、掛聲勇ましく、先陣の造船工約二千、新開地を西に横断したる折柄、電氣局階上より釘付き石油箱蓋様の板片行列の中央に落下したり。此板片こそ實に神戸爭議の運命を決するものとなれり。即ち危険なりとて行列中の一二名其板片を拾ひ同局へ談判に出かけた間に、行列は先陣と後陣の二隊に分離され、其間約半丁の距離を作るや、先陣の約半数、即ち千五百名は何事ならんと引返し、後陣は隋勢を續けて前方に雪崩かゝり、爰に先の一千五百名と、後部の六七千名と合致して大渦を描き人浪は勢ひ南に押流され萬餘の一大集團は潮の如く川崎本社へ通路への溢れかゝれり。時に午前九時二十分是れより襲、相生橋署の警官隊は第一、第二、第三の各警戒線を形作り、豫め警戒中なりしが勢ひに押されたる大行列の潮は先づ第一警戒線を自然突破の形となり、元中道亭前の電車線

路曲線に沿うて敷かれたる第二警戒線に雪崩掛れるため、四十餘名の警官隊は職工が川崎正門を襲はんとするものの如く解し、直に行動を開始し爭議團幹部が「當方で整理するから任して呉れ」と職工の川崎本社方面に流れ出でんとするのを極力食ひ止めんと努力せるに拘らず騎馬巡查は馬を煽らせ「進め」と號令し、十手を手にせる刑事、警官隊に少数の憲兵一齊に押し返し遂に警官は抜劍し必死に制止せる幹部の背後より斬り蒐り、騎馬巡查の如きは馬上白刃を閃めかしたるより、左なきだに連日連夜の奔命に昂奮せる爭議團は彌が上にも昂奮し爰に端なくも衝突を來し、附近は宛らの大修羅場と化したりしが警官隊は抜刀の儘職工の集團を追ひ散らし、職工團また瓦礫を投じて遠卷に暫時應戦し結局一部の七宮参拜團を残す外四散したり。

其一 思ひきや、神戸爭議は遂に凄慘なる流血を見たり。而して此衝突(第一次衝突)は、爭議史上の重要事實として仔細に觀察さるるところなかるべからず。

豫てより無抵抗主義を標榜し其行動を續けたる爭議團にては同日の参拜團行動に就ても深く留意し生田神社出發後楠社を通過せんとして警官隊の阻止に遭へる際も、命の儘に同境内通過を中止し裁判所前を相生町に出たるものにて、殊に川崎本社に近き七宮参拜に對しては特に注意を加へ萬一参拜團が川崎本社の方向に外れんか意外の誤解を生せんやも測り難きため故ら本町筋に避け既に一部三千の爭議職工は同方角に道を取り警戒中の警官隊も亦徒らに衝突を誘起するを避け、只管川崎職工通路方